

平成13年度国際化対応海外特別旅費報告

齋藤泰子

* 1. 論文名、2. 掲載先

1. デンマークの在宅ケアと訪問看護
2. 宮城大学看護学部紀要、5 (1)、127-132、2002

川村 武 他9名

1. *Helicobacter pylori* infection rate in patients treated with rifampicin - Eradication effect of rifampicin on *Helicobacter pylori*
2. 日本臨床化学療法学会誌 48 (11)、839-842、2000

真覚 健 他2名

1. 口唇裂、口蓋裂児の鼻の形状の顕著性について
2. Technical Report of IEICE, 101, 13-18, 2001

佐治順子 他1名

1. An Objective Assessment of Music Therapy for Persons Suffering from Senile Dementia.
2. Music therapy Research. The second. ed. Roberts, Z. L., Jessica Kingsley Publishers, London 2003 (in press)

高橋 方子

1. 看護労働に対する看護職の意識構造
2. 日本看護研究学会雑誌、24 (5)、45-56、2001

長澤治夫 他1名

1. 神経難病患者に対する音楽療法の効果について
2. 宮城大学看護学部紀要、6 (1)、29-34、2003

竹本由香里

1. 看護職における職務満足感と職業継続意志に関する研究
2. 進路指導研究 受理 印刷中

山本真千子 他6名

1. 正常性周期における自律神経活動の変化－圧反射感受性を用いた検討－
2. Japanese Journal of Electrocardiology、22 (6)、626-632、2002

藤田 比左子

1. 学会名：ICN 22nd Quadrennial Congress 2001
2. 演題名：The Relationships between Heat Environment and Body Temperature of Elderly People
3. 開催地：コペンハーゲン（デンマーク）
4. 開催期間：2001年6月10日～6月15日
5. 発表者：藤田比左子、高山美樹、香坂茂美
6. 発表要旨：

日本においては、熱中症は、予防法がある程度確立されているものの、運動をする者が対象であり、熱中症発生のリスク要因である高齢者を対象

としているとはいえない。そこで、本研究では、熱中症のハイリスク・グループである高齢者を対象として、暑熱環境下における高齢者の体温変化とその要因について明らかにすることを、目的とした。

調査対象は、老人保健施設に入所している高齢者13名（平均年齢88.6歳）である。調査方法は、1）1日4回（7時、11時、16時、20時）の体温測定、2）入所している環境測定 3）生活の状況（服装、水分摂取量、体重、入浴時間）である。体温測定は、腋窩温と鼓膜温の測定とし、鼓膜音は誤差を少なくするため、2回測定し、高い値を有効とした。入所している環境については、WBGT101（ISO-7243）を用いて測定し、湿球温・乾球温・湿度・黒球温度の4つを測定し、暑熱環境の指標の一つとされているWBGTを算出した。生活の状況については、看護師及び介護士による観察からデータを得た。調査期間は、2000年7月から8月までの2ヶ月間とした。

データ収集を実施した夏の環境は、気温の急激な上昇はみられなかった。また38度以上の発熱者はみられなかったが、37.5～38.0度までの発熱者が2～3日おきに1～2名みられた。特に体重あたりの水分摂取量との関連をみると、毎日気温に関係なく、同じ量を飲んでいるグループ・気温の上昇に数日遅れて量を増やすグループ・気温の上昇に合わせて量を増やすグループに分けられた。このことから、体温と水分摂取量と暑熱に関連があることが示唆された。特に、熱中症予防において、水分摂取量が減少することが多い高齢者に対し、暑熱に合わせた摂取量を調整していく必要性を今後検討することが課題である。